

白米一俵御書

弘安三年

五九歳

白米一俵・^{毛芋}一俵・^{河海蒼}一籠・^使御つかいをもってわざわざを^送くられて候。

人にも二つの^{たから}財あり。一には衣、二には食なり。經に云はく「有情は食に依って住す」と云云。文の心は、生ある者は衣と食とによって世にすむと申す心なり。魚は水にすむ、水を宅とす。木は地の上に^生をいて候、地を財とす。人は食によって生あり、食を財とす。いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり。^{へんまんさんぜんかいむ}遍満三千界無有直身^う命と^説とかれて、三千大千世界にみて候。財もいのちにはかへぬ事に候なり。さればいのちは^灯ともしびのごとし。食は^油あぶらのごとし。あぶら^尽つくれば^灯ともしび^消きへぬ。食なければいのち^命たへぬ。一切のかみ^神仏を^敬うやまいたてまつる始めの句には、南無と申す文字を^量ををき候なり。南無と申すはいかなる事ぞと申すに、南無と申すは天然のことばにて候。漢土・日本には^{きみょう}帰命と申す。帰命と申すは我が命を^命仏に奉ると申す事なり。我が身には分に随ひて妻子・眷属・所領・金銀等もてる人々もあり、また財なき人々もあり。財あるも財なきも^命命と申す財に^命すぎて候財は候はず。さればいにしへの^吉聖人賢人と申すは、命を^命仏にまいらせて^命仏にはなり候なり。

いわゆる雪山童子と申せし人は、身を鬼にまかせて八字をならへり。薬王菩薩と申せし人は、^{ひじ}臂をやいて法華經に奉る。我が朝にも聖徳太子と申せし人は、手の皮をはいで法華經をかき奉り、天智天皇と申せし国王は、無名^指指と申す^指ゆびを^指たいて^指釈迦仏に奉る。此等は賢人聖人の事なれば我等は叶ひがたき事にて候。

たゞし^命仏になり候事は、凡夫は志ざしと申す文字を心へて^命仏になり候なり。志ざしと申すはなに事ぞと、^{いさい}委細にかんがへて候へば、^{かんじん}觀心の法門なり。觀心の法門と申すはなに事ぞと^尋たづね候へば、たゞ一つきて候衣を法華經にまいらせ候が、身の^皮かわを^皮はぐにて候ぞ。うへたるよに、これは^離なしては、^{今日}けうの^命命をつぐべき物もなきに、たゞひとつ候^{御料}これうを^命仏にまいらせ候が、^命身命を^命仏にまいらせ候にて候ぞ。これは^臂薬王の^臂ひぢを^臂やき、雪山童子の身を鬼に^劣たびて候にも^劣あいをとらぬ^{功徳}功德にて候へば、^{じく}聖人の^養御ためには^養事供やう、^り凡夫のためには^養理くやう、^{止觀}止觀の第七の^{觀心}觀心の^{波羅}檀は^蜜ら蜜と申す^道法門なり。まことのみちは世間の^道事法にて候。金光明經には「若し深く^識世法を^識識れば^{即ち}即ち^是是^法法なり」と^{これ}と^{これ}かれ、涅槃經には「一切世間の^{外道}外道の^{經書}經書は^{皆是}皆是^{仏説}仏説にして^{外道}外道の^説説に^非非ず」と^仰仰せられて候を、^{妙樂}妙樂大師^{法華經}法華經の第六の卷の「一切世間の^{治生産業}治生産業は^{皆実相}皆実相と^{相違背}相違背せず」の^{經文}經文に^{引き合}引き合はせて^心心を^{あらわ}あらわされて候には、^{かれがれ}彼々の^{二經}二經は^{深心}深心の^{經々}經々なれども、彼の^{經々}經々は^浅いまだ^心心あさくして^{法華經}法華經に^{及ば}及ばざれば、^{世間}世間の^法法を^{仏法}仏法に^依依せて^ししらせて候。法華經は^然しからず。やがて^{世間}世間の^法法が^{仏法}仏法の^{全体}全体と^積積せられて候。爾前の^{經々}經々の^心心は、^心心より^{万法}万法を生ず。譬へば^心心は^{大地}大地のごとし^{草木}草木は^{万法}万法のごとしと申す。法華經は^ししからず。心すなはち^{大地}大地、^{大地}大地則ち^{草木}草木なり。爾前の^{經々}經々の^心心は、^心心の^{すむ}すむは^月月のごとし、^心心の^{きよ}きよきは^花花のごとし。法華經は^ししからず。月こそ^心心よ、^花花こそ^心心よと申す^{法門}法門なり。此をもって^{しろ}しろしめせ。白米は^{白米}白米には^ああらず。すなはち^命命なり。